

011.3
八
冬

大正十二年
李朝
冬

十月の歌

十月 秋冬月 小寒 秋霜 雪 せせ 誠忌 サ 涼 涼海 十取 夷儀 三

秋 連 初時 雨 雨 雨 三 初雪 落葉 五 木代葉 木 六

冬 搖 冬 簾 冬 月 大根 七 冬 枯 枯 尾 不 枯 八

枯 芦 枯 柳 枯 萩 枯 草 冬 草 九 枯 聖 留 不 把 把 十 茶 不 十

冬 木 立 麦 蒔 細 代 冬 蝗 子 鳥 十一 鴨 浮 麻 子 十二

冬 水 鳥 木 兔 十三 み ぎ さ わ 葱 菜 漬 十四

十一月の歌

冬 月 冬 日 和 冬 夜 冬 十五 顔 見 世 髪 置 沖 樂 鉢 十六

大 師 漢 十六 霜 十七 雪 十八 雪 吹 氷 十九



雪丸 粟 沙柱 五仙 二十 冬の栲 石 落む 蝦 海鼠 乾 蛙 廿二
冬 ぬくめを 追ふ時 廿三

十二月の部

師走 極月 寒 廿三丁 寒月 寒念佛 糟火 廿四丁

炭 廿五丁 火鉢 火桶 火爐 廿六丁 埋火 衾 紙衣 廿七丁

蒲葦 以中 葦 柵 冬田 廿八丁

煤 拂 冬山 豆 打 衣 配り 事 始 廿九丁 越 元 拂 廿九丁

長季 廿九丁 大晦日 三十丁 曆賣 表行 三十丁

り年 羊羹 年内立春 除夜 三十丁

祝 語 十二律

冬 十月の部

十月 神 皇 月

十月をひく事さうう山と靱 風 朗

十月や新日竹の子鹿の角 茶 抄

十月を海の中下りておきか 一 意

十月お菓や垣子も知も

多いおちお日暮はらそ神皇月 風 朗

小春

小春をやんよかよもてらうく鹿 日人

糸の持了ゆる果れ小春をな 素花

神留之

大曳の子れおろけり神のまゝ 旧天

糸はもう祈いふ神は留之 一色

ゆ〜と月をむても神のまゝ 一色

神留之七次忌

大徳和光日塵をぬく

了士を志つて香をまゝけろ翁の日 日人

をせ成翁像あり

まげとこそむ記いふら恵好月 素花

法命傳

油のやうま酒をみと田向やまれそ
かいま妙法の今日よまゝりてら

酒樽の車曳きあり法命傳 糸好

夢を言う常盤をけいふや法命傳 一色

都より謀り入る御命誨 久臧

十夜

岸つらりや十夜に人の異 曾詠

一夜さきさきしつゝ十夜証 唯令

夷誨

高聖よと町人とあり夷誨 一巻

本多さきさきさきさき夷誨 一巻

夫誨凡てさきさきさき 八巻

山里を別なまはる夫誨 日人

神迹

豆痕のさきさき別へ神迹 茶静

神迹さきさきぬ人もさきさき 三布

神対面

日好子うきさけうきさつ時 風歌

神対面川砂流きやとさき 八巻

親吉は夢さきさき神志とれ 一巻

もき腰の海ありて命一あれ 日人
松山やぬくふくも一お町る 久臧

時雨

時雨もやきづくもき 素花
志多れす度よ小高き 茶野
千ぬも一うや町る物 一蕙
山時雨もつて海りおろし 洞馬
素山のえゆもつちもき 礎入

さびや雨と志多れを一板 史子
今晩も志多れ切れ一きれ ち布
よきばらよ一のぬけも 一蕙
杉木一のけうもつちも 久臧
町るやうとちあつて一高し 日人
光なれ未れ三日月 八采
来とく杉一町書をまや水の泡 茶野
叶雨のとあつてはえなをう 礎令

区座な日社ほーうれの時雨々茶 史子

かきぬけてるれえうの記志を述は 日人

伸えゆる係子れ穴もーるれう 素志

此天来よ存もあぬまらぬう交 日人

変れまうよ浦めやう城村面哉 一之

時々や度り結實れまけそーみ 素志

戸ぬれを何も来ーやとれう 系部

時雨すほらるるもつらゆら入る 曾部

本もれ物 雪 風朗

はつ書れ傳て始まうりぬ 風朗

和書や志うも根つよ記子のと 洞天

まつ書れうまららるや物れ空 久藏

和書めしんえは枯ーう他の道 一志

後紫

とらうらと書くはさし屋屋哉 茶抄

ひらき帯するは屋とさる屋屋哉 史子

冬枯月方より文下見ゆる

種令

大根引

葉くう子ち傳る体にて大根引

素花

四毛をハ破るて大根引

日人

冬枯

冬枯下林の地ま此小百姓

一蕙

冬枯と菊果近し松の風

風朗

冬枯子係る船積垣根引

洞天

枯尾花

おちく子枯る木と尾花哉

一蕙

村居ふれてむく来りる

う布

おちく子枯る木と尾花哉

史子

おちく子枯る木と尾花哉

風朗

枯尾不果る夏女うあう郎

一蕙

一日と枯ぬ日とぬし枯尾不

一蕙

枯尾を志しくとおちく子

久藏

枯き 枯き

吹よれの雪うて枯るきうれ 素衣

もやこをちかきま枯るす泥丸 洞天

枯きういよいくとられく 日人

枯るつて一^{カサ}空 強るすまかな 史子

枯き 枯き

枯あし枯中よ妙に蓮葉外 一葉

枯まろり 芦はろけり 浪の法 雅令

枯き やさるがの風を松の害 史子

枯あし 寺へのけれハ水とらぬ 風歌

枯柳 枯萩

はるまじ 暑うも枯し 柳うれ 雅令

日けもいさ 詠いつ 近 萩 枯ふ

枯き 冬草

葛ね 魚もにうらむ 枯まろり 久 臧

厚の 枯るまろり くらまろり 一 史

とそふたして枯うたかつらま
茶好
喜けそそまら喜一冬好
う布

枯聖

に於上ノ寄方ヲ 續く枯聖を
日人
枯果く尺若くうぬ 大聖哉
久臧
り先好 俗よか帝あふ 聖
難令
新ゆふ又くを 枯聖好 居
一煮
何寸く日好 善うふ 枯聖哉
ハ 奈

是はう歩してても 枯聖うま
日人
生皮の油ぬく香や 枯聖越寸
史子

何リ茶

何くふふも けえて 嘆来る
何
人より若 芳好 尺え寸 何
日人
煮くか 日好 尺も や 何
難令
下子と 夕 何を けー 何
ハ 奈
本好 也とよ 立甲 斐 何う や 何
素 茶

枇杷花 茶の志

しらすよ古り泥よぐり枇杷の志 久減

東の志お日和よまきふや去偶伝り 洞天

冬木立

さひ日えて驚くもや冬木立 洞天

やま向く木立と冬木立 久減

麦時

麦時や新入月おちりて 桂令

麦時て花ふれきり福よけり 茶珍

細代ち冬蠅

上^三下^一や一^年おきれ細代ちな 風朗

蠅^三やを振んて入りぬ細代小屋 ち布

おちり月ハ落るよほし^一ろち 素花

川筋お仲間幾ぐり細代守 一を

話人と話して来し^一冬の蠅 洞天

千鳥

十はうんくさねしし子をかま 八 菜

啼やむよ一物さひれ子をかま 風 歌

子をかま啼やむよのうへも冬枯て 難 令

まねくは菴れな根越寸子をかま 一 也

六も皆生れし菴れ千をかま 布

折返寸も田へはぶちをかま 一 蕙

了の冷ねれ子をかま 徳 下 をかま 久 臧

ぬるや声れ廣ふ千をかま 日 人

大智てうなくしきり川千をかま 八 菜

鶏れ大智りきふちをかま 風 歌

うんと居てかまふしや啼をかま 史 子

里よ来て祠の実まふ千をかま 素 衣

小 鴨

睡れをれを抱へく近し鴨をかま 茶 新

赫し中へついとわき入小鴨をかま 八 菜

鴨鳴や時刻をくれのいり酒 一 也

襟元は後かたあや鴨の声 史子

浮鴨は夕暮運ふ嶋根を 八条

鴨の骨はくや鴨は留はる 三布

小一時門はけも鴨は暮 風歌

浮麻鳥

河を流河成ち流りてうき麻鳥 久藏

ふ足な親貞をかくし浮麻鳥 三布

鳥は親のまうらうて浮麻鳥 史子

浮鴨

きしきよよしれと付て池のらう 三布

来ふかきましつあをなし池のら 史子

かさねの帆の帆はあき浮鴨の浮ねは 素六

水鳥

水をた押合ておしおきせり 一色

水をた押合ておしおきせり 史子

水をた押合ておしおきせり 三布

葱 菜 漬

多凡呂ノオビニ入ルウ葱一丈 五分

子細ニヨクク号ニ菜漬哉 八奈

...

...

...

...

...

十一月 記

...

...

...

冬日和 冬之

...

...

...

...

...

...

うらうら二色花の雲の
きえるよと枝の雪の事
よきよきあり

むらら杜若のいもちてかきけ
一葉

冬

さかしくをれ事なり松の白
茶静

とく起て人うしきや冬に
久減

あつたよとれ物か立りあり
う布

舞衣をたたくにきよ
一葉

一葉見せ

秋のせやきけうの雪は
一葉

鳥のせの土草や畑は
葉部

神樂・髪置

くかりを面このえてか
風前

笛吹を米倉け子あり
一色

我子曾う笛と吹く
素衣

髪置よ小袖
雨天

浄土記 大師傳子塔心

戸の世はうしろえせう浄土記 八宗

ま似れそやくたいとを浄土 會政

凡まふれあつまうなり 大師粥 万布

見所よりぬ人なり 子塔心 唯令

霜

曉百枚死をの一木の葉は月 日人

ま一穂まうま管入おねれ 唯令

夕葉下をおりてほれ行ゆり 系抄

あつ猫のけけちをのや金根の葉 河天

水座よ葉の置やう 角田川 日人

あつえれを葉が葉もあを葉 系抄

夜柳よ小桶あせし葉おねれ 八宗

何れく居あ高き 葉おねれ 唯令

あ老葉れ斗りちほんや門の葉 史子

瓢の葉 葉あをねれ 唯令

お見えと言ふおれまを
まけぬまはつまぬおの
遠くや田おすむおの
久藏 茶抄

雪

清きお申も月のおは
秋重すおきうちを
おきとなくや并んで
正月を後子の掃く
洞天 对令

けしけしやあへくおれ
お見えを眺まぬ人の
うすの地は後ぬるを
降きや穴熊おれ眼
雪の風呂車おれ
ほちくおきおれ
おきよ水鍋を焚く
お一枚のおれ
風朗 仰天

き山の額 美うや 雲はき 日人

雲ち〜〜〜 藤よ入 雲の雲 素衣

積る雲日けうかくもふく〜〜 空令

雲はき云 雲は色んて通り〜 史千

登り戸をう〜とも雲は成りか 久減

きりうをうつえて雲の越い〜 布

ほち〜て雲よ入 雲は丁浮外 一色

雲おき〜谷の雲や月 雲を〜 洞天

雲下来ん 松の雲は照〜 茶粉

雲はくや 酒めらうぬも友成り 一色

雲う来〜 根戸の雲や 雲うき 八茶

雲の上 雲て 雲〜 雲の〜 雲 雲

戸をゆさよまけて 雲掃 根〜 系衣

雲は木の 雲をう 雲の折る 雲 一色

雲の雲 雲さる 氷をう 雲み 雲 八茶

雲〜さよ 雲の 雲てり 雲雲 風朗

雪吹

山きよくきき 越る雪吹う郎 ち布

柳雪よけいこき 此雪吹うな 史子

氷

きの宿きき二里先そ 柳雪 日人

柳雪 柳雪 柳雪 久藏

大きうても 示よえき 柳雪 史子

清ききとえをてし 柳雪 ち布

あさ日一の 柳雪 難令

柳雪 柳雪 ち布

雨散

柳雪 柳雪 系志

今柳雪 柳雪 茶静

柳雪 柳雪 日人

栗

栗 栗 系静

ぬくえり

并くは餅拾いぬ獲りき

風朗

つひそきぬくえりえりえり

日人

長身持

大男匠を持てしるえり

子布

十二月神

師走 極月

只居れそ柳とえり師走

洞天

月七日とほり師走哉

八奈

汁うせてえり師走のね

洞天

極月や門まつり

八奈

冬

冬けしるえり

日人

あしや解ぬきさよは伯れちる 風郎

きやき麻るもつひはまがくれ 兼持

居はくはときくさうさう入のふ 久臧

くくかやや橋のきば足さやア 洞天

眼はスゆるきさと来りぬ思れふ 雑令

入川のうははかきききはさゆ 八条

佛同りり用云はきききさうの 一色

葉水仙一はりつきくをば 日人

粉の丁ぬ行渡りきききさる 未出

不語のきふれと即めさわさきい 対令

ま合てききしおすう山の枝 史子

子ようくききさううさき水が 風郎

寒月

あはるきれなくてき月すまふ 久臧

き月や横川の杉れらるきき 一色

き月や庵下いろく附まは門 風朗

念佛唄八

いさふけ中をりおき念佛 史子

彌ハや水も茶も表け山 一色

櫛

櫛のやふふ言極さ夕アくれ 茶静

降よして仕るうへ一色櫛のり 久臧

櫛のぬて尺さハ小さき穀うな 八奈

櫛のうりゆりけ赤やまぬ息 風朗

注やうろ尺さく燈させ櫛濁る 口人

指賣れ赤ささし物に櫛のぬ 素老

炭

炭賣をかゝれて吸や牛捨子 八奈

炭竈の裏も佛に煙りうぬ ろ布

肩取くまうろもや炭煙り 日人

炭焼て善き同まうろさしぬ 洞天

炭焼て善き同まうろさしぬ 素老

炭のせれ起れそえゆる柱う即

唯今

炭残てけつてきてま 害同哉

一色

炭残よけおれよけり 之はいて

旧天

兼わいし 炉は積炭の炭きり

史千

冬のおく炭えなれハ深山先く

日人

椽へもく血きりきり炭

一色

岡^{カク}雨^{ボク}もはあつそりき炭け音

日人

勢さおま居よ漆り下炭のり

旧天

お著て炭もそきむや柔か女

旧天

おらうつくきさ下炭けけはら

久臧

火 鉢

遠山へいいてお 実火鉢さま

史子

火 桶

お改まきくおそきみり火桶お

史千

うらねのきりけおを桶哉

旧天

けしりも煮もといし火桶を

素七

火燵

うつり火燵の新又やほろりの洞天

森姥んて孫のあぬを燵の氣一色

加の火の燵の氣久臧

出の火の燵の氣素花

埋火

埋火の燵の氣ハ菜

埋火の燵の氣久臧

埋火の燵の氣史千

衾

衾の燵の氣柔静

衾の燵の氣ハ菜

衾の燵の氣史子

紙衣

紙衣の燵の氣史千

紙衣の燵の氣素花

横里ねまてむつかり居ふとん

八奈

船〜下らんまき〜即ち〜まう

久臈

うらん思ふばらたます〜恵ぬり

仰天

くちまめお全盛おのふらん〜那

ろ布

いと〜あむ〜う〜まてぬらん〜れ

史子

一浦の居まうろこ〜歌中ま

桑野

多岐 多田

多岐下ま〜はつき〜ま〜ひ〜く

風郎

節〜ま〜恒結〜ま〜れ田〜つ〜れ

ろ布

蝶拂

蝶拂う儚〜来〜ま〜船〜れ月

史千

眩〜〜〜神の蝶拂〜け〜けり

一蕙

蝶〜〜〜船もむ〜と〜来〜ま〜きり

素志

口〜吹〜て机の蝶をす〜ま〜〜〜

日人

阪次お登〜〜ら〜り〜蝶〜え〜舞

史子

煤掃て休て者の掃除哉 風朗

産め 豆抄

産め子猫め皆をすむ柱をな 史子

豆抄や卯子一都ハ嘆をい 史子

衣配 事始

衣配り併してときおこる 史子

針医者のお同き行や衣配り 史子

来年と田を催らるるけん

越 尺拂

とももきへき年をいそれあり 史子

尺拂さうつておこる又いさ 史子

良季の

良季のいよむし手むしにあらる 史子

良季のいれ顔の波や面がら 史子

良季のいのもぐげとえや 史子

良季のいやういさあるるけん 史子

大晒日掛

後日掛のこぼれ一六晒日 一

大晒日おそろも来て抱い 日人

掛とれ也り仕舞一と晒寺 一

曆賣

曆のこぼれえよ日と暮しけ 八

来年おそろて晒日かき曆を 徒令

春待

待春おほといてるるき袋うれ 久

登日志ぬ袖さへ薄し去後不 日人

去待や境の影よる日下て 史子

天一花中喜ら待うよきけの 八

子よつれてうそせ春待肩持哉 布

行年

けのの影きつと切火を 茶

けのやけよきをける 風朗

草履をかき履となりたハ

すみふりあうて此は五年を

こめれて

行々此笠よふをつく柱り耶 史千

年 義也

とくは善拙 广せぬふゆえにさう 一 史

倍ふりぬ人もうらうらうとく 史 史

昨日あはよもーとありとく 史 史

年内之春

まき造うはと買とる去手^ゾ六と一 素 史

わきふりも人てあうらう去年こと 史 子

除 取

人よ係て取取ちうぬ除^手取の鐘^{イ用} 素 史

十二律續篇

光る毛をまゝしつゝおひらき

硬布

こゝちへて指てもおひらき本丸

敷けよきおひらきの骨をかきならぬ

鼠お

はらきぬ指一本乃おもて

いつおれくあつうひなをこし一黒うな

海和

お月のおおさそりな一今と一休

氣ハ此よく氣の法とや悟進日

桐雨

すくみおて毛虫とせうきふん

おひらとス〜ても〜の〜

秋令

とつさうと三朝つ〜や〜

冷〜さも骨噛みつ〜てかま

抱義

おや希おま存子孫の小附丸

髭けうりええてをを焚くおひら

侯高

きく〜と〜とわ〜ふ〜

光りな〜水は押〜ほ〜ふ〜

大秋

肩わけて子供あへ出た火津な 大木

灯もして日の暮りての離る如 日暮

行燈の向きをまへるまかま 〃

や初より啼つてく迷われ 護物

あしと嘆もさるえきぬきりうら 〃

泉英いも場末なるし木め草い 祖文

まづ〜浅川越〜は吹さうら 〃

ふ心よ抑本始なき細ら那 有月

初冬や啼つて層のかきひさ 〃

月よまを身よ涼ふ状もなるさう 老樗

山よてそをの雨〜ぬ納豆うら 〃

空〜けり焼りもええて木下害 湖山

晴天や角かえて居る角力取 〃

雲中法海に魚のめ起し 千格

骨〜〜安かくすや傘お下 〃

舌解やせり〜てよ〜の川 〃

為忌下生さそふて是る袴
る年

山里や荒神柳をさうかなへし
禾木

秋三月おかし色さう唐のし
卦新

秋の水とさふなうて蓮のさ
卦新

風の来し登りてさう初日さ
、

山の月常よりして折廻代うな
し人

初^ナえそつて掃をけちる木のさ
、

一故さう仕うけてもさう初のお
御風

瘡あう横目の利くがかまつて

田よ啼きハ孰うも啼地うま
斗造

一浪の舟れくさよ天の川

草の芽や海をえよもる眼のつら
丁造

雅臭をうねとなしてやうな臭う

戸^ト相^ヨをもぬきさうなうさうまのふ
麻交

も掃て人を過すや寸さう川

風朗門人

史千輯

情まよふあおえは
細竹十二峰糸路
了りりりりりりり
海をふくむ世部
けふのこころ
まへに
あはれ

了々

十の世に 芳の

あの子は

よはりのきそりの

わいのこのや

題十二律後

余性懶墮老而益甚矣唯花陰
月下漫誦古又得意之發句以
慰無聊之外都不顧百事一日
蓬窓史子子携其所自收十二
律者來為請題一言十二律者
蓋取意於閩東十二家各自有
風調可喜也受而讀之則有似



孤月之斜者有似峻崖之峭
峭者或曉鶯穿花或雪梅覆堦
而一不見模擬之風十二律之
名可謂正當也余性懶墮老而
益甚矣而不能拚擲此書遂書
之以塞其責云

甲午夏五

武芝隱士

源蒼芳漢書

續十二律

近彫

歌仙十二律

同

海內十二律

同

